

# 海 (かいし) 市

No. 22

## ● 詩

- 02 横山 仁 生活の柄 (17)  
04 前田 勉 ある夏の日

## ● エッセイ

- 06 細部俊作 南木佳士「神かくし」を読んだ  
09 佐藤ただし 水田とツバメ (20)  
15 横山 仁 雑記 (22)

## ● コラム

- 13 前田 勉 ブログ「陽だまりの中のなか」から

## 生活の柄(17)

横山 仁

夜

もぬけの殻の布団は

家の前の道路に続いていた

土砂降りの雨の掛け布団

砂利道の敷き布団で

老母は眠っている

次の日

家の中へ引きずられたことも

服を取り替えさせられたことも

覚えていない

老母は

早えごと

ちらも洗ってね

と いつももの口癖で

迎えのデイサービスの車へのった

## ある夏の日

前田 勉

おそい夏

の午後

はるか遠く

雲の切れ目を縫うように

小さな機影が過ぎて行く

音も無く

ときおり太陽を浴びてキラリと光り

成田の空の下で

見慣れているはずなのに

かれは

かれの空に描かれた  
小さく

ちいさな機影が

北へ向かって行くのを見つけ  
わたしに伝えようと  
振り向いて指さす

涙が残っていた

墓苑を包む樹々の梢に

機影が消えても

ずっと見上げていた日

かれは

その時から

少年になった

## 南木佳士「神かくし」を読んだ

細部 俊作

南木佳士（昭和二六年―一九五一年―群馬県生まれ）は三八歳の時にバニック障害を発病し、それがうつ病に移行した。そのことは南木のいくつかのエッセーや小説に記されている。人によって症状の軽さ重さは異なるようだが、彼の病はとくに重かったのだという。「焦燥感に駆られ、希死念慮を追い払うのにすべてのエネルギーを使い果たし、かといって昼寝もできず、という状態が数年続いた」と『からだのままに』（二〇〇七年）に記している。その希死念慮に苦しむ姿の一端は「神かくし」の中にも描かれている。

この「神かくし」は文藝春秋社から二〇〇二年に刊行されたが、読んだのは大分後になってからだだった。そのなかで表題作の「神かくし」は老姉妹とのやりと

りが気に入っていた。このほか「濃霧」、「火映」、「廃屋」、「底石を探す」の四篇が収められている。

### ・「神かくし」

ある朝、見知った顔の老姉妹と偶然出くわし、三人で山へキノコ採りに行くことになった。姉の方は二〇年以上も肺炎で外来通院し、主人公の医師が担当する患者だった。いつかは瀕死の状態で救急に運ばれ、一命をとりとめたこともあった。

三人は山でキノコうどんの鍋を囲む。妹は小さい頃、両親についてこの山によく来たこと、自分の家の持ち山だったが、今はもう人手に渡っていると話す。そして「懐かしい人たちはみんな死んだ人。うふふっ」といい、姉からは、今朝は、死ぬ前に最後のキノコうどんを作りたいと思いつてでかけた、との話を聞かされたのだった。

死期を近くに感じた人がする、これが人生最後の何々という小さなイベントに、うっかりはまったことになったが、姉妹はそれが長年の担当医で気話まりしなくてすむ人柄と思えたのではないか、それで内心喜

んだのかもしれない。では医師の方はどうだったのだろうか。数年前この山で、このまま果てたらどんなに楽だろうと荒れた風景の中に入ろうとして、同行の妻に必死に止められたことがあった。その路から還ってきた医師には、今日の路は生と死につながる路だとの感慨をもったのかもしれない。帰宅後、布団にもぐっていると、妻が、その日一日夫の姿を見なかったといって神かくしにあったようだと言を上げ、医師も同感の声を上げたのだった。

#### ・「濃霧」

伯父の叙勲を祝う会に出た作家は、隣り合わせた老人から、自分の父親は作家の曾祖父だと告げられる。曾祖父は昔、芝居の台本を書いていたが、あるとき芝居が原因で悲劇が起きてしまう。それ以来、曾祖父は書くことをやめたのだという。迷路のような血の系譜と、絵空事を書くという血筋、書くことの怖さ、そうしたことをあからさまにされ、帰りのマイクロバスの車窓に映った自分の顔に、隣席だった老人と酷似している様を見つけて「どこへ帰ろうとしているのだ

ろう」と自問する。

「起きてしまった出来事はそれをそっくり身にまとうしかありません、そうやってみんなとんでもない老人になってゆくんです」という言葉があった。とんでもない老人になるにはちよつと遅かったかなア。

#### ・「火映」

こんな言葉があった。「書くために故意に石を蹴り、そこにたどり着くまでの足跡を記す言葉探しをしている」。小説家はそんなふうにして書いているものなのだナ。

#### ・「廃屋」

この本に取められた小説の特徴は、出来事が時間の推移にしたがって展開されるその途中途中で過去の記憶が顔を出すという点にあるようだ。

「廃屋」2の場合、生家の屋根が破損したとの知らせを受けて、医師は翌日、様子を見に出かけることにした。その途中の町の風景や川、浅間山火口を眺める。故郷の集落に入り、昨日連絡をくれた隣家の人へのあ

いさつに向かう。そんな具合に、時間軸に沿って主人公が場所を移動して見聞きする現在が書かれている。

同時に、その時間軸の折々に様々な記憶がよみがえって挿話のように語られる。例えば……朝、次男の使っていたスニーカーを履いて行くことにしたこと、次男は家族とともに祖父の死をみとったが、その後うつ症状が出た。その原因を自分の中に求める医師。次男が回復してから買ってやったのがこのスニーカーだった。駅前でタクシーを降りて町を歩き始めた医師。この町に書店があつて、高校のころ広辞苑を買つた。後年、その広辞苑を手に小説を書き始めた。辞書の「あ」の項にある「青空」の語から、晴天下にみたある男の記憶がよみがえる……。そんなふう<sup>に</sup>過去の出来事が思い出されていく。

しかし、時間軸に沿った話が現在の話なら、よみがえつた記憶も医師の内部で反芻する現在の話であつて、どちらも主であつて挿話でもある。現在と過去、実在と記憶が球を打ち返し合つていて、繰り返し出された話の集合が小説空間を豊かにしているのだと感じた。

こんな言葉があつた。「人間五十年というのは寿命

のことばかりではなく、己の過去を夢まぼろしと認識できるようになるまで少なくとも五十年はかかる、との意味ではないか」。過去を夢まぼろしと認識できると、現実の日々の過ごし方はどう変わる？

南木佳士の本の読みはじめは、「山行記」(二〇一年)で、読んだのは文庫版(二〇一六年)だった。秋田大学医学部を出て長野県佐久市の病院の勤務医となつた作家がどんな山にどんなふうに登っているのかを知りたかつたから。そこにはうつつからの回復を兼ねて登山を始めた著者の姿があり、山に同行した病院の同僚後輩とのぶつきらぼうで思いやりもあるやりとりは親しみがもてたし、等身大と思われる述懐が気に入つたから、その後、文庫本を数冊、単行本も数冊買いためた。ところが積読状態だつたり読んだつもりだつた本があることに最近気がついた。いつかまた、拾つて温める言葉を探してみたい。



## 水田とツバメ (二〇)

佐藤ただし

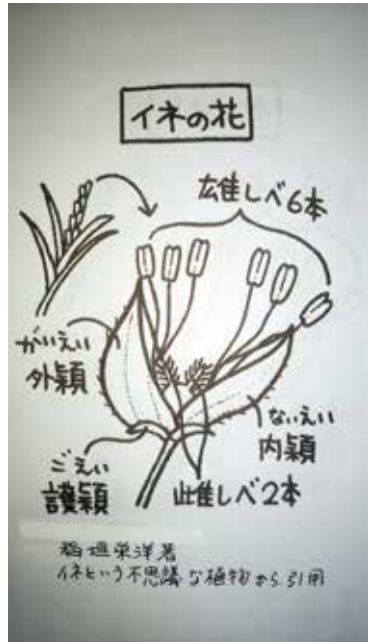
・イネ (花弁を持たない植物)

十一月十七日の夕方、テレビでニュースを見ていると、秋田県産の新しいコメの名前を発表していた。新しい品種の名前は「サキホコレ」だった。

あきたこまちがデビューしてから三十数年の年月が経ち、ようやくこまちに代わる品種が出てきたことに農家ならずとも期待が高まるどころだが、その名前が「サキホコレ」と知り、前号(海市二一号)でイネは花弁を持たないと書いたこともあり、花弁を持たないイネをサキホコレと呼ぶのはどうなのかと思った。またそもそもイネの花つてどの部分を指すのか、改めて確認したくなった。

飯村茂樹著、イネ—米が出来るまで—を読むと、イネの実(コメ)の集まりである穂は、初め小さな綿の塊のような形をしている。それが段々と茎の中で大きくなって、穎もみぢらが出来はじめ、その中におしべとめしべが出来てくる。イネの花を構成しているのは内穎ないえいと外穎がいという二枚の穎と六本のおしべ、そして先が二つに分かれためしべ。それから穎の外側にある護穎ごえいによって構成されている。つまり、ひと粒一粒の穎に包まれたものがイネの花ということになる。そしてこの花にはサクラやアサガオのような花弁はない。イネを何十年も作っているながら、植物のことを殆ど知らない自分に改めて気づく始末だ。それに花弁を持たない花があるというのも初めて知ったことだった。(添付図・イネの花参照。稲垣榮洋著・イネという不思議な植物から引用)

かつて、イネの生育調査をしていた二〇代の頃、六月の末に幼穂形成期に入ったイネの穂を一本抜き、茎を剥いで根の近くにある幼穂が作られているかどうか調べていた時期があった。いまはやっていないがこの幼穂形成期を見ながら、穂肥のタイミングを計ってい



ただが、幼穂は確かに小さな白い綿のような状態だった。

この幼穂が徐々に大きくなって穎が出来、その後、七月下旬から八月月上旬に始まる出穂とほぼ同時に穎の中のおしべについている葯が割れて花粉が落ち、めしべに付着し受粉する。受粉が済むと穎は閉じるので、ひとつの花は一時間ほどで咲き終わるといふ。

ついでにイネにはなぜ花弁が無いのか。稲垣栄洋著「イネという不思議な植物」によるとイネ科の植物の祖先はユリ科の植物で、ユリ科からツユクサ科の植物を経て進化してきたという。

植物の祖先は松や杉などの裸子科植物で、花粉を運ぶのは風による「風媒化」だが、杉の花粉が大量に飛散するのを見てもわかるように、風を頼りに受粉するには大量の花粉が必要で効率が悪い。そこで植物はきれいな花を咲かせ、昆虫に来てもらって花粉を運ばせる「虫媒化」に進化していったという。確かにユリもツユクサも花弁を持つている。しかしイネ科の植物には花弁がないのはなぜか。それはイネ科の植物が出てきた頃（今から三千万年前）地球は寒冷化し、また乾燥化した頃だったそうだ。そのため森が縮小し荒れ果てた地帯が広がってゆき、昆虫の数も減ってしまったため、イネ科植物は虫媒化からさらに進化した風媒化になるために花弁を捨てたという。

もともとイネ科の植物はグラジオラスのように一本の茎に多くの花を付けていたと考えられている。それが気候の変化に対応するために、花びらを捨ててシンプルな形に進化してゆき、さらにイネはたくさんあった花を全て退化させ、一本の茎に一つの花を作り上げたのだという。そうすることでヒエやアワなど他のイネ科の植物よりも大きな実（コメ）を付けることが出来



たという。

夏の暑い盛り、七月末から八月上旬にかけて、出穂が始まった頃の穂を見ると、緑色の穎の中から小さな白い花のようなものが顔を出し、ほのかに甘い匂いが田んぼに広がるが、これはおしべで花の一部である。この本によると、イネは穎の中でほとんどおしべの花粉が入っている葯が割れ、花粉がめしべに付着する自家受粉だそう、穎が割れておしべが外に出るのは、花粉が他の花の手助けをするためだが、実際はそれぞれの穎の中で受粉が終わっているようである。イネは松や杉よりも効率の良い風媒化に進化した植物なのだろう。

新しい米の名前がサキホコレと聞いた時、花卉が無いのにサキホコレとはこれ如何にと思ったが、イネはこの地球上で生きのびて行くために花弁を捨て、効率の良い風媒化に進化し、また大きな実を付けて、人間に食べられやすい植物となったことになる。

長い歴史の中で高い能力を身に付けてきたイネだが、今は作る側の事情で田植機やコンバインなどの機械に合わせた省力化したイネづくりが主流だ。丈の長さや

莖数などが管理された倒伏しないイネづくりが求められている。その姿はイネ本来の能力を抑えたイネづくりに思える。しかしそうした中で久しぶりにイネ本来の能力が発揮された姿を見ることができた。

そこは昨年まで五年ほど大豆を作付けしていたが、今年はいネを作付けすることになった田んぼである。イネの名前は「めんこいな」。前年まで大豆を作っていたこともあり、大豆の根が土の中に残っているので、土に窒素分を多く蓄えていることから、イネが出来すぎて倒伏するのを防ぐために作付けすることが多い。

水田に大豆を作付けすると土壌が畑地化し、その後水田に戻すと、イネの根が地中深くまで伸びてゆくの、野生的で丈夫なイネに育つ。田んぼに肥料を入れないにもかかわらずというか、肥料を入れていないため、根が養分を求めて地中深くまで伸びて行くのかも知れない。土壌の構造が発達していると、根は地中一メートルも伸びて行くという。こうした田んぼのイネは稲刈り直前まで全体が生きていて、莖が弓のようになり、穂が頭を垂れていて畦畔に付くようになり見事である。こうしたイネの実（コメ）はそれを食べ

る人間に力を与えてくれるに違いない。



●前田勉ブログ「陽だまりの中のなか」から

佐藤ただし詩集『柵を超える牡牛のように』

秋田市の「海市」同人、佐藤ただしさんの過去の詩作品が詩集『柵を超える牡牛のように』として、約40年の時間を経て出版社へ書肆えんから小冊子で発行された。

実は、現在の「海市」同人4人（佐藤、細部、横山、前田）は、かつて詩誌『匪』の同人でもあった。

なぜ今なのか？ 彼はあとがきの中で「今から40年以上も前に書いたものを、今回まとめることによつてどのような意味があるのか」と迷ったと書く。だが「こうしたものを意味あるものにするかしないかは、これからの自分次第だ」と自らへ言い聞かせている。収録作品は同誌第12号（1975年3月30日発行）から第26号（1979年5月25日発行）までに発表された彼の詩活動全19編。以降、彼は詩を書いていない。

詩とは全く別世界に生きてきた当時の、佐藤青年が、詩誌「匪」の同人と時間をともにすることによつて描かれた詩世界は、実は今のこの時代でも通じるアイデンティティ（ああ懐かしい言葉だ）そのものの姿ではないだろうか……。農家の長男でサラリーマンである彼は、「農」に対してひと時距離を持っていた時期があったように記憶するが、書き始めた詩にはそのことが良く表れているようにも感じられる。40年も前のこと故、当時の状況も感慨もすぐさま湧き出さないが、一人の青年が生きて（生きて）いたということははっきりと証明できている。20歳前後でのこの世界観、凄いではないか。気付かなかった、と今頃言つては失礼になってしまう。な。

「柵を超える牡牛のように」

柵を超える牡牛のように

家畜が獣と化してゆく時

風は奪われていたものをたっぷり含んで

もとの場所へ吹き付けてゆく

おれには

ことばと素手の感触

喉のつかえ棒は取りさつて

この部屋へ呼ぼう

本当は農民でありたい人達を

隣の男よ

舐めてみたことがあるかい

田畑の土を

苦いようでもじつは甘いんだ

(近ごろの土は薬品の味がする)

それじゃおれ達の仕事は

土の甘さをとり戻すことにある

「父」

父の仮面を剥ぐ風

農良で

家庭で

父の仮面を剥ぐ風

風は仮面をつくり

仮面を剥がずにはおかない

父は仮面を取り外すわけにはゆかない

著者 佐藤ただし

出版 書肆えん(秋田市新屋松美町5-6)

発行日 2020年5月5日

体裁 A5判中綴じ18頁

頒価 記載なし。

(2020年7月10日)



横山 仁

「海市」の前号で、佐藤さんがヒエについてかいて  
いるが、ヒエは救荒食物だったときいたことがあり、  
ウイキペディアですらべてみた。合評会でもすこし紹  
介したが、あらためて記しておく。なお、下線は他に  
リンクされているということ。(以下、同じ)

(引用開始)

日本では古くから重要な主食穀物であったため、米、  
アワと並んで祭事において重要な役割を果たしてき  
た。宮中の新嘗祭に際しても用いられ、このために宮  
中に献上するヒエを青森県などで栽培する制度があ  
る。天皇が神に捧げ、自らもこれを食べる穀物にヒエ  
が含まれることは、ヒエが決して単なる米の代用食で

はない意義を持っていたことを雄弁に物語る。(略)  
また、飢饉の際の非常食として高く評価されており、  
二宮尊徳が農民達の反対を押し切ってヒエの栽培を奨  
励したおかげで、天保の大飢饉の際に多くの農民が救  
われたといわれている。これは後述のように、冷害に  
強く、安定した生産量を確保することが容易だった反  
面、社会的な評価が低く、売却が困難であったため、  
結果的に一番貯蔵に回しやすい作物であったからであ  
るといわれている。

その一方、伝統的な主食穀物の中では最も卑しめられ  
ていた側面もあり、食味の悪い貧しい者の食べる穀物  
とされることも多かった。これは、米の調理法の影響  
を受けた炊飯調理が粘り気のないヒエの調理法として  
は必ずしも適していなかったこと、冷害に強く安定し  
た生産量を確保することが容易だった反面、米などに  
比べて生産性は必ずしも高くなかったこと、類果の構  
造から「稗搗筋 (ひえつきぼし)」のような労働歌を  
生んだほど、脱稗・精白に重労働を要したことなどが  
要因として挙げられる。このため、貧困の辛い記憶と  
強く結びついた穀物となった。

さらに、栽培ヒエの原種であるイヌビエなど、野生種ヒエ属数種は主要な田畑の雑草であり、稲作がこれらの雑草の制圧に大きな労力を要したことも、ヒエに対する心象を悪くしている。

また、生産者の自給作物の側面が強かったため、その生産量に比して、流通量は必ずしも多くなかったと考えられる。

そのため、歴史的、文化的、経済的に重要度が極めて高い穀物でありながら、文字記録がヒエについて沈黙することも多く、その実像が不当に低く評価されている面がある。

現代の食文化に置いても、雑穀を混ぜた飯が栄養価の観点で観直されているが、上述のとおり加工の難しさから、どうしても高価な食材となってしまうため、ヒエは大麦やアワほどには利用されていないのが現状である。

(引用終わり)

\*

武田邦彦氏については、これまでも紹介したが、

ウエブで [Netya](https://note.com/netya_07) さん ([https://note.com/netya\\_07](https://note.com/netya_07)) も武田先生を紹介している。以下、「マスク着用に関する東京都医師会の見解(2月13日)」「新型コロナウイルス感染症に関するリーフレット」 「マスク着用必須の空気」(2020/09/19) より。太字は原文。

(引用開始)

マスク着用に関する興味深い世論調査がある。マスク着用の動機は感染予防でなく「みんながやっているから」<同志社大学 調査>この調査でマスクは「飛沫を飛ばして人に感染させるリスクが高いから」との回答は皆無であった。

イソターネットメディア<真相深入り虎ノ門ニュース 9月18日金>では同様の指摘をしていた。(マスク関連→16分33秒～23分20秒)この放送では、詳細に説明されています。必見です！この放送で聞き捨てならないのは、2月の東京都医師会の発表を当時報道せずに8月になってから (健康で症状のない方のマスク着用の有効性は高くはないと言われています) を発表して、そのとおりです。と小さく報道したとの



こと。この放送で話されたことは、時間がなくて根拠となる情報を見つけないことが多く、第三者が言ったことを鵜呑みにしてこのブログに記載することにしたが、放送で話をした「武田邦彦」氏は、私の最も信頼する科学者であるからしてこのブログに引用した。(武田氏は「とんでも科学者」と言われメディアから叩かれているが、氏の話を聴くと誰かから聞いた話は一切なく自らが調査しその根拠を示し、誤魔化さず自らの責任ではつきりとその見解を伝えているところが信頼に足る所입니다。)

2月～8月の間、既存（オールド）メディアはマスク着用はいかなる時も必須であるという社会に空気を醸成しておきながら、手のひらを返して2月の東京都医師会の見解を8月になって初めて小さく報道をしたことに怒りすら感じた。  
マスク本来の着用による有用性・必要性を理解せずに、「みんながマスクをするから」というお寒い理由でマスクを着用している社会が虚しく思える。そんな思いをしているのは私だけであろうか。……以上  
(引用終わり)

\*

今号の「海市」が発行されるころでも、まだアメリカ大統領は決まっていなかったろうが、今回の選挙は、特に不正選挙が叫ばれ、ネットでも盛んに報道されている。集計ソフトの問題や、廃棄された郵便物、中国で印刷された偽造用紙など…。

以下、かんたんに紹介してみる。

- ①監視員が郵便投票用紙を確認することを阻止されたこと
- ②各選挙区間の不平等な投票ルール
- ③なりすまし投票
- ④投票用紙の受領日の変更
- ⑤バイデンの投票用紙の反復集計
- ⑥事前申請のない不在者投票集計
- ⑦住民登録数よりも多い投票数
- ⑧外国の投票システムを使用して大統領選を妨害したこと

など。

集計ソフトの問題では、ベネズエラの大統領選挙でも不正が行われたらしい。ウイキペディアから。

(引用開始)

ニコラス・マドゥロ・モロス (別表記：マドゥエロ、スペイン語：Nicolás Maduro Moros、1962年11月23日-) は、ベネズエラの政治家。2013年から同国大統領 (第54代)。ただし、2019年1月11日以降の2期日については、後述の通り前年の大統領選挙に不正があったとしてベネズエラ議会や欧米諸国など一部の国から選挙結果を認められておらず、フアン・グアイド国会議長が暫定大統領として認められているがグアイドは実質的な大統領としての権限は持っていない。第22代共和国副大統領、ベネズエラ統一社会党書記長。ウゴ・チャベス政権下の閣僚として頭角を現し、「チャベス側近の中で最も有能な行政官」と評される<sup>4</sup>。(引用終わり)

そして、今回のアメリカ大統領選挙で問題になって

いるドミニオン社の集計ソフトは、もともとマドゥエロが、自分が大統領になるために開発させたともいわれている。また、選挙の一か月前には、中国企業が投資したという。「大紀元」より)

(引用開始)

米メディア *Infowars* 12月1日付によると、米国証券取引委員会 (SEC) の文書で、投票機製造および集計ソフト開発会社、ドミニオン (Dominion Voting Systems) は選挙開始の1カ月前、中国当局と深いつながりのある瑞銀証券 (UBS Securities LLC) から4億ドル (約418億円) の出資を受け取っていたことが明らかになった。(引用終わり)

さらには、不正をしている映像も現れた。(大紀元日本ウエブ編集部)

(引用開始)

ドナルド・トランプ大統領の弁護団は3日、ジョージ

ア州議会の公聴会で、集計所の監視カメラの映像を提示した。映像には、投票日の夜に監視員を開票所から帰した後、開票作業が続行され、大量の票が入った複数のスーツケースがテーブルの下から引き出される様子が映っている。

(引用終わり)

この不正のあと、バイデン票が一気に伸びたという。いずれ、全部？が明らかにされるだろうが、トランプ大統領は、こうした不正が行われることを予想していたともいう。おとり捜査と言われるゆえんだ。

バイデンも、息子の賄賂に加担したということで、負けると牢屋入りなので、必死のようだ。オバマの疑惑もあり。

\*

と想っていたら、例の愛知県知事のリコールでも、似たようなことがあったらしい。選挙管理委員会しか知らないはずの情報が、津田大介とか香山リカなどに

ながれている。つまり、愛知県知事側のスパイがリコール側に潜り込んでいたということのようだ。

また、地元メディアは、こうしたリコールの動きを報道しなかったらしい。

\*

「放知技」の亀さんの紹介より。(DS = 闇の政府)

「チャェンネル桜の水島総氏と、林千勝氏の対談動画が目に残った。」【Front Japan 桜】速報！トランプ重大発表 / 林千勝～世界支配者達の争い【桜 R2/12/3】 (<https://www.youtube.com/watch?v=XW9xcF1rXMJ>)「DSが武漢ウイルスをトランプ攻撃の材料に、利用していると考えていることが分かる。さらに林氏は、DSが武漢ウイルスを武漢ウイルス研究所に持ち込み、資金を出して研究させたと述べていたが、このあたりはネット界でも、今までに数多くの記事や動画があるので、多くの人たちにとって既知のことだろう。」「DSは武漢ウイルスで世界的な大恐慌を起こさせ、株師の大暴落で大資本家を儲けさせようと画策していた」などなど。

## あとがき

◆北海道に暮らす娘宅に食料品などを送った。コロナ感染が急増した向こうでは、人出の多いスーパーに子連れで買い物するのに二の足を踏むだろう。送った箱にはニンジン、ネギ、ショウガも入れた。これらは友人の畑の一角を借りてつくったものだ。コロナにも寒さにも縮こまらずに冬を乗り越えたい。(S)

◆畑でネギを掘っていると軽トラで男がやって来た。メガネをかけた50才前後のやせた男で、慣れない口調でまっすぐこちらを見て鉄屑は無いかと聞いてきた。使わなくなった農機具等を引き取ってもらった。履き古しひび割れて裂けた長靴を履きよく働く男だった。社会で働く意味を教えられたように思った。(T)

◆ギバサ(アカモク)のぬるぬる、フコイダンが身体にいいといわれているが、スーパーにある八森のは、着色料をつかっているので、パス。グランマートのは、つかっていないとのことで、買うときはここからにしている。ところが、先日知人から頂戴したのは、乾燥したギバサだった。販売所は、八峰町産直ぶりこ。生と違って賞味期限も長いが、このためだけに、行くのも何だかなあ。ラーメン好きは、どこへでもいくらしいが。(J)

◆若竹千佐子『おらおらでひとりいぐも』の映画公開を楽しみにしていたが、コミカルな演出云々との評を目にした途端、興味は薄れた。原作にそういう箇所はないはずだが、脚本・監督の“表現”ということか。こうした場合の(承諾した)原作者の本音はどうなんだろう。(B)

---

「海市」 第22号

2020年12月20日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方